

思想の身体

悪の巻

島蘭進 編著

朴奎泰

源淳子

高橋原

藤田正勝

佐藤弘夫

善を目指して生きると主張しても、

実際には利己的な欲望や他者との葛藤を

避けられず、他者を傷つけたり、

暴力に巻き込まれたりせざるをえない。

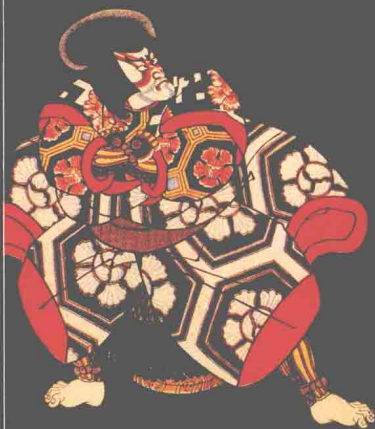
自らが苦しむのは

自然の力や暴力により

「こうむる悪」を受けるからだけではなく、

自らが「おかす悪」を

避けられないからである。



春秋社

思想の身体

悪の巻

島蘭進

編著

朴奎泰

源淳子

高橋原

藤田正勝

佐藤弘夫

生きる主張しても、

「的」な欲望や他者との葛藤を

他者を傷つけたり、

ひまれたりせざるをえない。

ひのは

力により

を受けるからだけではなく、

「悪」を

【執筆者紹介】

- 島蘭進 1948年東京都生まれ。東京大学文学部宗教学科卒業。現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。宗教学。
- 朴奎泰 1959年韓国ソウル生まれ。ソウル大学校人文大学独文科卒業。現在、漢陽大学校国際文化大学日本語文化学部教授。
- 源淳子 1947年島根県生まれ。大谷大学大学院博士課程満期退学。現在、関西大学人権問題研究室委嘱研究委員。
- 高橋原 1969年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。現在、財団法人国際宗教研究所研究員。
- 藤田正勝 1949年三重県生まれ。京都大学卒業。ポーフム大学大学院修了。現在、京都大学大学院教授。日本哲学史。
- 佐藤弘夫 1953年宮城県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了。現在、東北大学大学院文学研究科教授。

シリーズ思想の身体——悪の巻

2006年11月30日 第1刷発行

編者 島蘭進
発行者 神田明
発行所 株式会社 春秋社
〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6
電話 03-3255-9611 (営業)
03-3255-9614 (編集)
振替 00180-6-24861
<http://www.shunjusha.co.jp/>
装丁 美柑和俊
印刷所 萩原印刷株式会社

©Printed in Japan 2006

ISBN 4-393-33251-2

定価はカバーに表示してあります

はじめに

日本人の世界観、宇宙観、死生観、倫理観を見直す必要を私たちは切実に感じている。それも広い視野のもと総合的にとらえたいと願っている。二一世紀に入り、新たな時代の息吹の中で、日本人の思想的営みをラディカルに、つまりは根底から問い直したい。

日本の思想や哲学や宗教や心意伝承について、これまでもさまざまな捉え返しがなされてきた。しかしこれまでの試みでは、われわれの心と魂、思考と感性を広く見渡す知的な場が欠けていた。

たとえば、思想史、宗教学、仏教学、歴史学、国文学、民衆史、民俗学、文化人類学などという学問分野や知的ジャンルが存在してきたが、そのようなジャンルの枠内に逼塞するような限定の仕方では不十分であり、対象が語りかけてくるものを汲み尽くせないのではなからうか。そうした分野やジャンルを横断し、新たな視角で日本の思想文化史を見直したい。その際、「思想」はもはや文字文化に習熟した人々の書きのこした文書や権威を確立した文献資料群だけを指すものではない。

民俗学や文化人類学や民衆史が注目してきたような、実践や感性や体験に関わる表現領域にも十分な関心を払いたい。また、表象文化の研究やフィールドワーク的な研究の成果にも目を向けたいし、現代社会に生きる人々が日常生活で直面しているようなアクチュアルな諸問題との関わりにも鋭敏でありたい。

本シリーズはこのように現代人にとって身近であるとともに人間生活の全体に関わるものとして、日本の思想文化や精神文化をとらえることを目指し、そのような探求の目標を「思想の身体」と名づけている。

「身体」とは文字どおりの人間のからだを意味するとともに、広く人間生活の「かたち」を意味し、さらには「基層」「下層」「深層」を意味する。

抽象化された概念的思考によってまとめあげ頭で支配するものとしての「思想」に対して、日々の生の営みの中で生起してくる実践的諸問題に届くような「思想の身体」を考え直したい。心臓や内臓、手足や骨や筋肉の思考にも、記憶や情念や魂とよばれる領域にも、さらには交わりや仕草や姿態が表すものにも注目したい。

したがって、これまで「正統的」と見られていたような思想史や宗教史からはもれ落ちてしまいがちだった「深み」や「無意識」や「周縁」や「裏」の部分にも鋭い探求の垂鉛を降ろすようにしたい。

各巻のタイトルとなった漢字一字はこのような探求のための手がかりとして選ばれたものだ。

「愛」「悪」「霊」「徳」「性」「死」「狂」「戒」「声」の九つの語である。

現代人の身近な生活のリアリティに関わるとともに、先史時代から現代に至る日本の「思想の身体」を問うのにふさわしい語を選んで各巻の主題とし、編者にはそれぞれの主題をそれぞれの仕方ですく探求していただくこととした。

編者もそうだが、執筆者もその素養はさまざまな学問的分野に及び、さらには芸術家などのさまざまな表現者にも登場願っている。論じ方も多様であるが、多様な論のぶつかりあいから新たな論点が浮上してくることをねらい、対論や鼎論、座論による深化を図っている。

だが、多様な形式や立場を組み込みつつも、シリーズの全体を貫くのは「思想の身体」を問うというモチーフであり、そこにこそ本シリーズの集約点がある。新しい思想史、文化史、精神史への手応えある展望を開きたいという願いがそこにかけられている。

現代人が個々の切実な問題を考えようとするとき、われわれは「思想の身体」という新しい視点から問いかけてみざるをえない。本シリーズはそのような要求に応えながら、未来を照らす大きなビジョンを提示すべく、学芸的な蓄積と情熱を惜しみなく注ぎ込もうとするものである。

思想の身体——悪の巻

目次

はじめに

i

第一章 悪に向き合う宗教

島蘭進

3

第二章 日本の宗教文化における悪と他者

朴奎泰

97

第三章 女と性と悪

源淳子

133

第四章 悪と誠

高橋原

163

鼎 論 日本人にとって悪とは何か

藤田正勝・佐藤弘夫・島菌進

199

あとがき

251

思想の身体——悪の巻

シリーズ編集委員◎島蘭進・黒住真・鎌田東一

悪

第一章

悪に向き合う宗教

——「弱肉強食」の時代と

初期大本教

島蘭進

の

巻

第一章 惡に向き合う宗教——「弱肉強食」の時代と初期大本教

はじめに

† 惡にまつわる語の頻出 † なぜ惡にこだわったのか

一 「惡」をめぐる「思想の身体」

† 惡の語義 † 惡と救済 † 「こうむる惡」の克服というビジョン † コスモロジカルな惡

† 近代的な自由とニヒリズム † 惡をもてあます現代世界と宗教

二 近代日本宗教における惡と構造的暴力

† 近代日本の惡の思想と民衆宗教 † 惡の現世から来世へ † 浄土真宗と近代日本

† 本願寺の支配と惡の意識 † 新宗教の生命主義的救済観 † 過去からやってくる惡

† 大本教形成期の惡の意識と時代背景 † 社会問題の発生と民衆生活の悲惨

† 惡を直視しようとする学問と文学 † 片山潜と社会問題 † 社会的キリスト教と社会主義

† 構造的暴力と社会惡

三 出口なおの惡の経験

† なおの前半生の苦難 † 貧困と夫婦の間柄 † なおの家族の葛藤

†三女ひさの「発狂」と救いの神 †長女よねの「発狂」となおの神がかり

†よねの結婚と悲劇 †鹿造へのなおの怒り

四 出口なおの悪の理念

†金光教への期待と失望

†天理教と危機預言

†「陽気ぐらし」の状況認識

†「世直り」への期待

†悪神金神の救済神化

†悪の世界の始まりの神話

†苦しむ神、苦しむ自己

†女性の中からだと男性のたましい

†なおの悪の理念の特徴

五 出口王仁三郎の悪(1)——善悪の対立、悪との戦い

†悪の理念の継承と発展

†村人との軋轢と貧困の悲哀

†初期の著作のなかの「悪」

†善と悪の対置の論理

†社会正義Ⅱ構造的暴力への注目

†終末観と反戦思想

†自己膨脹主義と善悪二元論

六 出口王仁三郎の悪(2)——贖罪による救いと善悪の複雑性・不分明性

†変性男子と変性女子

†巖の御魂と瑞の御魂の相補性

†罪の贖い

†速素戔鳴命Ⅱ王仁三郎の苦難

†御靈魂のことわけの救済神話

†悪の由来についての両義性

†信徒集団の内部葛藤の反映

七 初期大本教の悪の思想の民衆性と近代性

†なおと王仁三郎の樂觀性

†悪の不分明性の意識

†王仁三郎の懷疑心

†偽善への批判と諧謔

†孤独・懷疑と他罰性・自己膨脹性

†大本教の悪の思想の特徴

はじめに

十悪にまつわる語の頻出

近代日本の名高い民衆宗教者であり、大本教の創唱者の一人である出口なお（一八三六—一九一八）の「筆先」には「悪」にまつわる語が頻繁に登場する。

三ぜん世界一同に開く梅の花、良うしろの金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構はな行けぬ国であるぞよ。外国は獸類けものの世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獸の世になりて居るぞよ。外国人にばかりかれて、尻の毛まで抜かれて居りても、未だ目が覚めん暗がりの世になりて居るぞよ、是では、国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、立替へ立直しを致すぞよ。用意を成されよ。この世は全然、新あらたつの世に替へて了ふぞよ（明治二五年旧正月、『大本資料集成』第一巻、一三頁、なお本稿の引用文の太字はすべて島蘭がしるしづけのために付したものである）。

これは出口なおが初めて神がかった一八九二年に口をついて出たとされる「筆先」で、「初発の神論」とよばれるものである。まがまがしい言葉やイメージが次々と飛び出してくる。ここでは、「外国」が「悪魔」や「暗がり」の原因と見なされている。だが、それは「強いもの勝ち」とか「獣類けものの世」とも言われるように、「日本」のただ中の抑圧的暴力として存在している。私たち自身が悪に関わり、悪に苦しんでいるのだ。だが、その悪の支配は「立替へ立直し」によって覆され、神国に生まれ変わる可能性がある。なおの神はそう告げている。

この世の鬼を往生させて、世界のものを安心させるぞよ。よい心をもたれよ。悪はなごうはつづかんぞよ。／（「／」は原文改行の意）ほととぎす声は聞けども、すがたは見えぬ、この世を金神、かげから守りておりたぞよ。／いままでは末法の世。妙見仏の世、惡道な世、強いもの勝ちの世、この世になれば結構な世になるぞよ（明治三五年日不明、同上、一五頁）。

十なぜ悪にこだわったのか

理想世界の到来が預言されているが、まずは一人一人の心が問われている。「悪き」心から「よい心」への改心が求められる。

世界のあらためいたすぞよ。あまり人民の心が悪きゆえに、世界は神の眼からは、さつぱり暗やみになりておるぞよ。洗濯いたして良くなるぞよ。はよう改信いたされよ。／人もよきよう、わが身もよきようと思わな、この世はいけぬぞよ。強いものがちの世であるぞよ、これではこの世はいけぬぞよ（明治二九年八月一七日、同上、二〇頁）。

今度は人民の身魂の洗濯であるぞよ。昔からなき事ばかりであるぞよ。良きびつくり致す事もあるぞよ、わるきびつくりもあるぞよ、よき身魂とわるき身魂とを分けて見せて改心を致さすぞよ（明治三〇年一〇月三二日、同上、四六―四七頁）。

日本の新宗教の中でこのように悪について、また善と悪との対立について多くを説いた例はあまり見当たらない。キリスト教なら事情は異なるかもしれない。悪の世から善の世への転換の預言は、キリスト教に広く見られる。また、近代以前の仏教であればこれも異なるだろう。末法の世の悪から逃れて善に満ちた仏の世界へと旅立つ夢は多くの人々に分けもたれた。だが、現世主義的であり、この世が良き生命力の充溢した世界であると見るところに特徴がある新宗教の中にあつて（対馬路人他、一九七九）第二節でふれる）、このような悪の強調は際だっている。近代日本の民衆の「思想の身体」にいかにして「悪」の理念が受肉したか。それともけつきよくは受肉しなかったのか。大本教の運動を広めた出口なおと出口王仁三郎（二八七―一九四八）の宗教的世界は、私たちをそのような興味深い問いへと引き込んでいく。